

田園の憂鬱・殉情詩集

佐藤春夫



田園の憂鬱・殉情詩集

佐藤春夫

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進 編 日本の文学 36

田園の憂鬱・殉情詩集

著 者 佐藤春夫

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和六十年二月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森蔭人

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五四―七〇三二（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五六―六二二一（代）

製作 東京連合印刷株式会社

印刷 大日本法令印刷株式会社

函・表紙印刷 共同印刷株式会社

凡 例

一、歴史的仮名づかいで書かれた作品は、現代仮名づかいに改めた。

二、韻文の作品は、原表記・歴史的仮名づかいのままとした。ただし、振仮名は現代表記に改めた。

三、音訓表にこだわることなく、適宜、振仮名を多用した。

四、その他、用字・用語・送り仮名などについては、つとめて原文を生かした。

なお本文は『病める薔薇』（大正七年十一月発行、天佑社）

——『西班牙犬の家』、『田園の憂鬱』（大正八年六月発行、新潮社）、『殉情詩集』（大正十年七月発行、新潮社）を底本とし、各版を参照して明らかな誤植と見なされるもののみを改めた。

（編集部）

西班牙犬の家

(夢見心地になることの好きな人々の為^ための短篇)

フラテ（犬の名）は急に駆け出して、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところで、私を待つて居る。この犬は非常に賢い犬で、私の年来の友達であるが、私の妻などは勿論大多数の人間などよりよほど賢い、と私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時には、きつとフラテを連れて出る。奴は時々、思いもかけぬようなどころへ自分をつれてゆく。で近頃では私は散歩といえば、自分でどこへ行こうなどと考えずに、この犬の行く方へだまってついて行くことに決めて居るようなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私は未だ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せて今日はそこを歩こう。そこで私はそこを曲る。その細い道は

だらだらの坂道で、時々ひどく曲りくねって居る。おれはその道に沿うて犬について、景色を見るでもなく、考えるでもなく、ただぼんやりと空想に耽^{ふけ}って歩く。時々、空を仰いで雲を見る。ひょいと道ばたの草の花が目につく。そこで私はその花を摘^つんで、自分の鼻の先で匂^{にお}うて見る。何という花だか知らないがいい匂である。指で摘んでくるくるとまわし乍^{なが}ら歩く。するとフラテは何かの拍子にそれを見つけて、ちょっと立^{たち}どまって、首をかしげて、私の目のなかをのぞき込む。それを欲しいという顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちょっと嗅^かいで見て、何だ、ビスケットじゃなかったのかと言いたげである。そうして又急に駆け出す。こんな風にして私は二時間近くも歩いた。

歩いているうちに我々はひどく高くへ登ったものと見える。そこはちょっとした見晴^{みはらし}で、打開けた一面の畑の下に、遠くどこの町とも知れない町が、雲と

霞かすみとの間からぼんやりと見える。しばらくそれを見て居たが、たしかに町に相違ない。それにしてもあんな方角に、あれほどの人家のある場所があるとすれば、一たい何処どこなのであろう。私は少し腑ふに落ちぬ氣持がする。しかし私はこの辺一帯の地理は一向に知らないのだから、解わからないのも無理ではないが。それはそれとして、さて後うしろの方とは注意して見ると、そこは極くなだらかな傾斜で、遠くへ行けば行くほど低くなって居るらしく、何でも一面の雑木林のようである。その雑木林は可なり深いようだ。そうしてさほど太くもない沢山たぐさんの木々の幹の半面を照して、正午に間もない優しい春の日ざしが、榆にれや樺かしや栗くりや白樺しろかばなどの芽生めばえしたばかりの爽さわやかな葉の透すきま間から、煙のように、また匂のように流れ込んで、その幹や地面やの日かげと日向ひなたとの加減が、ちよつと口では言えない種類の美しさである。おれはこの雑木林の奥へ入って行きたい氣もちになった。その林のなかは、かき別けねばならぬというほどの深い草原でもなく、

行こうと思えばわけもないからだ。

私の友人のフラテも私と同じ考えであったと見える。彼はうれしげにずんずんと林のなかへ這入^{はい}ってゆく。私もその後に従うた。約一丁ばかり進んだかと思ふころ、犬は今までの歩き方とは違うような足どりになった。気らくな今までの散歩の態度ではなく、織るようないそがしさに足を動かす。鼻を前の方に突き出して居る。これは何かを発見したに違いない。兎^{うさぎ}の足あとであったのか、それとも草のなかに鳥の巣でもあるのであろうか。あちらこちらと気せわしげに行き来するうちに、犬は其^その行くべき道を発見したものらしく、真直^{まっす}ぐに進み初めた。私は少しばかり好奇心をもってその後を追うて行った。我々は時々、交尾して居たらしい梢^{こずえ}の野鳥を駭^{おどろ}かした。斯^こうした早足で行くこと三十分ばかりで、犬は急に立ちどまった。同時に私は潺湲^{*せんかん}たる水の音を聞きつけたような気がした。(一たいこの辺は泉の多い地方である) 犬は耳を瘖性^{かんしょう}らしく動かし

て二三間ひきかえして、再び地面を嗅ぐや、今度は左の方へ折れて歩み出した。思ったよりもこの林の深いのに少しおどろいた。この地方にこんな広い雑木林があるとは考えなかったが、この工合ではこの林は二三百町歩もあるかも知れない。犬の様子といい、いつまでもつづく林といい、おれは好奇心で一杯になつて来た。こうしてまた二三十分間ほど行くうちに、犬は再び立とまった。さて、わっ、わっ！ という風に短く二声吠えた。その時までは、つい気がつかずに居たが、直ぐ目の前に一軒の家があるのである。それにしても多少の不思議である、こんなところに唯一つの住家があるとは。それが炭焼き小屋でない以上は。

打見たところ、この家には別に庭という風なものはない様子で、ただ唐突にその林のなかに雑まざつて居るのである。この「林のなかに雑まざつて居る」という言葉はここでは一番よくはまる。今も言った通り私はすぐ目の前でこの家を発見

したのだからして、その遠望の姿を知るわけにはいかぬ。また恐らくはこの家は、この地勢と位置とから考えて見てさほど遠くから認め得られようとも思えない。近づいてのこの家は、別段に変わった家とも思えない。ただその家は草屋根ではあったけれども、普通の百姓家とはちょっと趣が違ふ。というのは、この家の窓はすべてガラス戸で西洋風な造え方なのである。ここから入口の见えないところを見ると、我々は今多分この家の背後と側面とに対して立つて居るものと思う。その角のところから二方面の壁の半分ずつほどを覆うたつたかずらだけが、言わばこの家のここからの姿に多少の風情と興味とを具えしめて居る装飾で、他は一見極く質朴な、こんな林のなかにありそうな家なのである。私は初め、これはこの林の番小屋ではないかしらと思った。それにしては少し大きすぎる。又わざわざこんな家を建てて番をしなければならぬほどの林でもない。と思ひ直してこの最初の認定を否定した。兎も角も私はこの家へ這入っ

て見よう。道に迷うたものだと言って、茶の一杯ももらって持って来た弁当に、我々は我々の空腹を満みたそう。と思つて、その家の正面だと思える方へ歩み出した。すると今まで目の方の注意によつて忘れられて居たらしい耳の感覚が働いて、私は流れが近くにあることを知った。さきに潺湲せんかんたる水声を耳にしたと思つたのはこの近所であつたのであらう。

正面へ廻まわつて見ると、そこも一面の林に面して居た。ただここへ来て一つの奇異な事には、その家の入口は、家全体のつり合から考えてひどく贅沢ぜいたくにも立派な石の階段が丁度四級もついて居るのであつた。その石は家の他の部分よりも、何故か古くなって所々苔こけが生えて居るのである。そうしてこの正面である南側の窓の下には家の壁に沿うて一列に、時を分たず咲くであらうと思える紅い小さな薔薇ばらの花が、わがもの顔に乱れ咲いて居た。そればかりではない。その薔薇の叢くさむらの下から帯のような幅で、きらきらと日にかがやきながら、水が流

れ出て居るのである。それが一見どうしてもその家のなから流れ出て居る
しか思えない。私の家来のフラテはこの水をさも甘そうにしたたかに飲んで居
た。私は一瞥のうちにこれらのものを自分の瞳へ刻みつけた。

さて私は静に石段の上に登る。ひっそりとしたこの四辺の世界に対して、私
の靴音は静寂を破るというほどでもなく響いた。私は「おれは今、隠者か、で
なければ魔法使の家を訪問して居るのだぞ」と自分自身に戯れて見た。そうし
て私の犬の方を見ると、彼は別段変った風もなく、赤い舌を垂れて、尾をふっ
て居た。

私はここつと西洋風の扉を西洋風にたたいて見た。内からは何の返答もな
い。私はもう一ぺん同じことを繰返さねばならなかった。内からはやっぱり返
答がない。今度は声を出して案内を乞うて見た。依然、何の反響もない。留守
なのかしら空家なのかしらと考えているうちに私は多少不気味になって来た。

そこでそつと足音をぬすんで——これは何の爲であつたかわからないが——薔薇のある方の窓のところへ立って、そこから脊のびをして内を見まわして見た。

窓にはこの家の外見とは似合しくない立派な品の、黒ずんだ海老茶にところどころ青い線の見えるどつしりとした窓かけがしてあつたけれども、それは半分ほどしぼつてあつたので部屋の中かはよく見えた。珍らしい事には、この部屋の中央には、石で彫つて出来た大きな水盤があつてその高さは床の上から二尺とはないが、その真中のところからは、水が湧立つて居て、水盤のふちからは不斷に水がこぼれて居る。そこで水盤には青い苔が生えて、その附近の床——これもやっぱり石であつた——は少ししめっぽく見える。そのこぼれた水が薔薇のなかからきらきら光りながら蛇のようにぬけ出して来る水なのだろうということは、後で考えて見て解つた。私はこの水盤には少なからず驚いた。ちよいと異風な家だとはさきほどから気がついたものの、こんな異体の知れな

い仕掛まであらうとは予想出来ないからだ。そこで私の好奇心は、一層注意ぶかく家の内部を窓越しに観察し始めた。床も石である。何という石だか知らないが、青白いような石で水で湿った部分は美しい青色であった。それが無造作に、切出した時の自然のままの面を利用して列べてある。入口から一番奥の方に、壁にこれも石で出来たファイヤプレイスがあり、その右手には棚が三段ほどあって、何だか皿見たようなものが積み重ねたり、列んだりして居る。それとは反対の側に——今、私がのぞいて居る南側の窓の三つあるうちの一番奥の隅の窓の下に大きな素木のままの裸の卓があって、その上には……何があるのか顔をびったりくつつけても硝子が邪魔をして覗き込めないから見られない。おや待てよ、これは勿論空家ではない、それどころか、つい今のさきまで人が居たに相違ない。というのはその大きな卓の片隅から、吸いさしの煙草から出る煙の糸が非常に静かに二尺ほど真直ぐに立ちのぼって、そこで一つゆれて、

それからだんだん上へゆくほど乱れて行くのが見えるではないか。

私はこの煙を見て、今まで思いがけぬことばかりなので、つい忘れて居た煙草のことを思出した。^{おもいだ}そこで自分も一本を出して火をつけた。それからどうかしてこの家のなかへ入って見たいという好奇心がどうもおさえ切れなくなった。さてつくづく考えるうちに、私は決心をした。この家の中へ入って行こう。留守中でもいい這入^{はい}ってやろう、若し主人が帰って来たならばおれは正直にそのわけを話すのだ。こんな変った生活をして居る人なのだから、そう話せば何とも言うまい。反^{かえ}って歓迎してくれないとも限らぬ。それには今まで荷厄^{にやつかい}介にし居たこの絵具箱が、おれの泥棒^{どろぼう}ではないという証人として役立つであろう。私は虫のいいことを考えて斯^こう決心した。そこでもう一度入口の階段を上って、念のため声をかけてそつと扉をあけた。扉には別に錠も下りては居なかったから。